令和６年度　牧之原市議会

# 総務建設委員会視察研修報告書

視察日　　令和６年７月１日（月）～ ７月３日（水）

視察先　　◇福井県若狭町：就農支援について

◇滋賀県東近江市：高収益農業を実現するための取組について

◇滋賀県甲賀市：市の特産品であるお茶に関する取組にについて

◇京都府和束町：宇治茶の郷づくりについて

# 視 察 研 修 報 告 書

牧之原市議会議長　様

氏名　濵 﨑 一 輝

| | |
|---|---|
| 研　修　名 | 令和６年度　牧之原市議会総務建設委員会視察研修 |
| 研修の期間 | 令和６年７月１日(月)～７月３日(水) |
| 研　修　先 | （１）　福井県若狭町<br>（２）　滋賀県東近江市<br>（３）　滋賀県甲賀市<br>（４）　京都府和束町 |
| 研修の目的 | （１）　福井県若狭町：就農支援について<br>（２）　滋賀県東近江市：高収益農業を実現するための施策について<br>（３）　滋賀県甲賀市：市の特産品であるお茶に関する取組について<br>（４）　京都府和束町：宇治茶の郷づくりについて |

今回、我々総務建設委員会の所管事務調査事項となっている「地域資源を活かした農業振興について」、就農支援やお茶に特化した取り組みの先進地への行政視察を行った。

➢ **福井県若狭町**

❖ **就農支援について**

若狭町は、農業を基幹産業として発展してきた町で、水田を中心とした約 2,000 ヘクタールの農地があるが、高齢化と後継者不足により、担い手不足が深刻になりこの状況を打破するために、行政だけではなく集落住民と民間企業（大阪の設計事務所）が連携して、新たな担い手を育成していく（有）かみなか農学舎を設立した。

**（有限会社かみなか農学舎の特徴）**

- 民間企業と連携していく中で、現地の課題をよく把握し、しっかりとリサーチをした上で、新たな農業従事者として都市部の若者に目を付けた。
- 2 年間の農業研修は、ただ農業の技術などを教えるだけではなく、研修生や社員が寝泊まりできる研修施設を整えた。この施設で同じ研修生同士が共同生活を行いながら、集落住民との交流により農村生活も体験していく中で、将来に渡り農業で生計が立てられるのかがイメージできるようになっている。
- 研修期間中は僅かではあるが研修手当が出ている。また、町内への就農にあたっては、就農準備金も用意されており手厚い支援体制が構築されている。
- 地域農業者との接点が多く、仕事面では専門的な基礎知識や生産知識が習得で

き、プライベートでは地域のお祭りや行事などに参加することで、外から来た若者にとって疎外感を感じることなく、地域に溶け込むことができている。

- その影響もあり、これまでここで研修を終えた研修生約 40 名のうち半数がこの地に就農定住しており、地域と関わる農業研修の成果がでている。
- ここでは、「就農支援事業」「インターンシップ事業」「農業体験実習」「販売（オンラインショップ）」4 つの事業を展開しており、加えて若狭町の魅力を町外に PR しており、移住・定住のみならず交流人口も増えている。

➢ **滋賀県東近江市**

❖ **高収益農業を実現するための施策について**

東近江市は、近畿最大の耕作面積を誇る広大な農地を有し、水稲を中心に、麦、大豆、野菜に果樹、畜産と幅広い農業が営まれている。しかし、耕作面積の内 96%を占める水田が、半世紀に渡る米の生産調整が終了し収益性が悪化。農業で持続的かつ安定した農業ビジネスを構築していくために、地域商社（株）東近江あぐりステーションを設立した。

**（東近江市の農業と東近江あぐりステーションの特徴）**

- 市と 4 つの JA が出資して地域商社（株）東近江あぐりステーションを設立。市をあげて儲かる農業経営に取り組んでいる。
- 市場や問屋を通さず JA と地域商社が出荷された野菜等を安定価格にて買取ることで、安定的な収入が見込める。また、商品化作業は地域商社が行うことで、農家は生産に集中できている。
- 中規模流通システムを構築し、計画生産、安定買取、需要予測、地域内流通と徹底した管理体制の中、それぞれが役割を認識し責任を持って運営している。
- 地域内流通を意識し、生鮮、加工業務用ともに独自に販売ルート（買取販売、インショップ販売*生鮮のみ）を設けている。
- 水田を活用した多種多様な野菜の生産への転換を支援しており、加えて高収益作物生産振興事業として、多くの補助メニューが用意されている。

- 大規模農家だけではなく、中小及び個人農家も多く会員として参加している。

➢ **滋賀県甲賀市**

❖ **特産品であるお茶に関する取組について**

甲賀市は、滋賀県産の茶の約９割を生産しており、お茶は市を代表する特産品のひとつになっている。更に、お茶の産地としての知名度を高めるため、お茶に特化したオーガニックビレッジ宣言をしており、有機農業実施計画栽培を策定。また、お茶の生産時期が気候の影響で他県に比べ遅いため、市の新たなブランドとして「土山一晩ほうじ茶」を誕生させた。

**（お茶の取り組みの特徴）**

- 市内には２つの茶産地があり、それぞれの気候や地形にあった栽培方法が取り入れられており、個人農家が多く法人は少ない。
- お茶としては、かぶせ茶と煎茶がメインだが、かぶせ茶に関しては近年海外での抹茶ブームを背景に、てん茶に力を入れる農家が増えてきている。
- お茶はミル芽で刈り取る農家が多く、これも上位の茶産地との差別化を図っている。
- 茶生産量県内１位である土山茶の知名度及び販売価格の向上を目指し、新たなお茶ブランド「土山一晩ほうじ茶」を誕生させた。このお茶を国内及び海外へPRするために、首都圏でのPRに力を入れている。

➢ 京都府和束町

❖ 宇治茶の郷づくりについて

和束町は、古くから丘陵地において茶産業が営まれており、高級茶として名高い宇治茶の 40%近くを生産する京都府内トップの最大産地である。また、抹茶の原料となるてん茶の生産量は全国トップクラスの生産量を誇っている。

（和束町のお茶へのこだわりの特徴）

- 歴史のある茶農家が多く、個人経営がほとんどである。加えて、探求心が旺盛で茶農家が元気で勢いがある。そこには、宇治茶ブランドの影響がかなりあると感じる。
- お茶の生産だけでなく、宇治茶生産の景観にも価値を見出し、観光事業にも力を入れている。しかし、その一方でオーバーツーリズムによる生産農家とのトラブルが発生しており、課題はいろいろあるようだ。
- 京都府の茶生産（荒茶）は全国 4 位であるが（そのほとんどが和束町で生産）、品質にこだわり近年では、手間はかかるが価値のあるてん茶生産に力を入れている。
- 兼業農家が多いようだが、作物としてはお茶一本で生計を立てている農家が多く、大きい茶農家の後継者もしっかり育っている。

和東町庁舎

3,441人
1,657世帯
※65歳以上人口
48.8%
区分
和東町
京都府全体
第1次産業
第2次産業
第3次産業
計
源は弥生時代まで遡る、歴史の古い町
和東天満宮
安祖親王陵墓
和東
和東のいとなみ

# 視 察 研 修 報 告 書

牧之原市議会議長　様

氏名　　松 下 定 弘

| | |
|---|---|
| 研　修　名 | 令和６年度　牧之原市議会総務建設委員会視察研修 |
| 研修の期間 | 令和６年７月１日(月)～７月３日(水) |
| 研　修　先 | （１）　福井県若狭町<br>（２）　滋賀県東近江市<br>（３）　滋賀県甲賀市<br>（４）　京都府和束町 |
| 研修の目的 | （１）　福井県若狭町：就農支援について<br>（２）　滋賀県東近江市：高収益農業を実現するための施策について<br>（３）　滋賀県甲賀市：市の特産品であるお茶に関する取組について<br>（４）　京都府和束町：宇治茶の郷づくりについて |

２０２４年7月１日（月）

・研修事項「就農支援について」

(1) 福井県若狭町三方庁舎２階第１会議室

就農支援について若狭町産業振興課長、課長補佐、主査の方々から様々な就農支援事業の説明を受けました。若狭町は、人口１３．４７４人（令和６年６月現在）産業は農業を基幹として主に水田が農地面積の９０％を占め農家のうち８０％が米づくりを行っている。現在、農業従事者の高齢化も進んでいて、若い世代には農業に見切りをつける人も多く、農地の転用や貸与も多くなっている。課題は牧之原市も同じで、大きな課題として捉えている。今ある農地の確保と維持を継続するための若狭町の取り組みとして、「かみなか農楽舎」の事業は大変興味があった。

この取り組みは、農業に全く未経験の方でも研修生として実践的な栽培研修から農業経営学習まで期間を決めて農村総合公園研修棟に宿泊して学習を行う点で、決められたカリキュラムをこなし卒業から農業経営まで面倒を見ている点でした。また、研修生として迎えるまでの「見習い期間」を設けて、指導員と現役研修生が研修生を見極めている点が他に無い取り組みでした。事業としては、誰でも手を挙げた方を優先して合格しようと考えるが、見習い期間中に本当に農業に対する姿勢を見極めているところと、卒業してからもしっかりと卒業生の面倒を見るため少数（４人程）を見込んでいる点に農業支援の本質を感じます。

（有）かみなか農楽舎の現在経営されている取締役の「八代恵理」さんは、研修生の第一期生でした。農楽舎についての説明も八代さんから受けましたが、楽しく説明している姿を見ると、農業に対する「熱意」を感じられました。

質疑応答のあと実際に「かみなか農楽舎」の施設を見学して一日目の視察を終了しました。

視察して思ったこと

・かみなか農楽舎事業では、地域の住民や農業を経営している方の協力無くして成り立たないところに重点と捉えて、何回でも足を運び理解を得る取り組む姿勢
・研修時から農業経営の大切さを研修員に植え付けて、軌道に乗るまで最後まで面倒を見る本気度
・かみなか農楽舎の研修員は、一つの建物に入り学ぶこと、人数制限をしてきっちりと卒業まで計画を立てていく取り組み（約３名～4名）

２０２４年7月２日（火）

・研修事項「高収益農業を実現するための施策について」

（２）滋賀県東近江市

東近江市は、人口１１１．５５０人（令和６年６月）と、牧之原市と比較にならない程の都市です。農産物も米や野菜のほか果樹など栽培にも適した土地です。東近江市では、特徴的な農家支援事業で、（株）東近江あぐりステーション事業を立ち上げたことです。東近江市は、JA 事業所が４箇所あり、市と JA が出資して販売個所を増やしたことで、各農家が JA 販売所へ直接行く農家、自分で販売する農家、JA あぐりステーションへ販路を選ぶなど、各農家が高収入できる販売ルートをチョイスできるような仕組みづくりにした点です。

視察して思ったこと

・高収益作物生産振興事業補助金では、６区分化した補助事業では、きめ細かな補助をしている点
・農業経営に関して「あぐりステーション」を通じ個人農家にも支援している点
・職員の方が、農業経営者へコミュニケーションをとることで、信頼関係を強くしている点

２０２４年7月２日（火）

・研修事項「市の特産品であるお茶に関する取り組みについて」

（３）滋賀県甲賀市

滋賀県のお茶の歴史は、約８００年前から続いて、静岡茶より古く現在まで茶農家を支えているところを学びたく思いました。お茶の特有である「香り」に着目し、特にほうじ茶の香りを引き立たせた「土山一晩ほうじ茶」といったブランド商品に力を入れている。今までの製法から、更に一晩寝かせ香りを引き立たせた製法で、一つのブランド戦略を取っています。PR 方法として首都圏で甲賀のお茶を一般社団法人東京滋賀県人会へ業務委託して PR しています。首都圏では、歌舞伎座での試飲販売の実施することで、国内および国外へも拡大することを目指しています。

視察して思ったこと

令和５年４月に市長自らオーガニックビレッジ宣言をしたこと、土山・朝宮の２大産地を有する県内最大のお茶どころである甲賀市は、今後もさらに環境に配慮した有機農業を推進していくためにオーガニックビレッジ宣言をしたことでしたが、お茶農家や農業経営者の理解を得るための取り組みでは、何回も現地に出向き農家の方たちとのコミュニケーションが大事だと職員の方が熱く語られました。

２０２４年7月３日（水）

・研修事項「宇治茶の郷づくりについて」

（４）京都府相楽郡和束町

和束町（ワヅカチョウ）の強みは、基幹農業であるお茶生産にあります。京都府では、和束町がお茶の生産では断トツの１位府内で４２％の生産量を誇り、各お茶農家のお茶に対する研究と良い製法の取り組みに知識を広めようと日々努力しています。（馬場町長のお話からお聞きしました。）一番の強みは、「宇治茶」といった全国的なブランド力にあります。宇治茶の名前が大きな強みで、牧之原市の生茶葉価格より数倍の価格取引が和束町のお茶農家を支えています。とは言え、高齢化の進む茶農家の「担い手不足」も課題としてあります。

和束町としてもＮＰＯ法人「日本茶で最も美しい村」連合に加盟（Ｈ２５．１０．４）日本茶のふるさと「宇治茶生産の景観」を国内外に発信しています。

視察して思ったこと

今回の和束町視察では、職員の方が説明するより、ほとんど馬場町長の説明から質疑応答まで語っていただきました。町長の農業に対する思いが強く感じられました。一番感じたのは、茶農家の皆さん個人がお茶に対する思いが馬場町長から伝わりました。最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

総評

今回の視察で共通して言えるのは、お茶を含む農家の皆さんとのコミュニケーションの重要性を強く感じました。同じ思いを持っていても、「理解する」ことに時間をかけて粘り強く取り組む姿勢の必要性を感じました。何より、生産する農家さんと行政の一枚岩無くして成り立たないと感じました。牧之原茶は視察先のお茶歴史のブランド力はありませんが、牧之原市ではこれまで築き上げた「静岡茶」のブランド力を生かして国内外に発信し、多くの皆さんに味わっていただく場の提供や、発信に力を入れて、お茶農家と共に自信を持って売り出す環境づくりに応援して行きたいと感じました。

# 視 察 研 修 報 告 書

牧之原市議会議長　様

氏名　　村 田 博 英

| | |
|---|---|
| 研　修　名 | 令和６年度　牧之原市議会総務建設委員会視察研修 |
| 研修の期間 | 令和６年７月１日(月)～７月３日(水) |
| 研　修　先 | （１）　福井県若狭町<br>（２）　滋賀県東近江市<br>（３）　滋賀県甲賀市<br>（４）　京都府和束町 |
| 研修の目的 | （１）　福井県若狭町：就農支援について<br>（２）　滋賀県東近江市：高収益農業を実現するための施策について<br>（３）　滋賀県甲賀市：市の特産品であるお茶に関する取組について<br>（４）　京都府和束町：宇治茶の郷づくりについて |

若狭町就農支援

・三方五湖、ラムサール条約登録湿地帯、で有名、農業は水稲。
・農楽舎を設立、観光園ではなく就農定住を目指し農地保全と後継者の育成を行い究極的な目標である地域活性化を図る。
・若狭町第三代渡辺英朗町長（特技、漫才）のリーダーシップのもと農業再建に取り組む姿勢が強く反映していると感じた。

東近江市、高収益農業施策

・近江は近江商人の出生地、遠近江は京から遠い近江という意味で山崎貞一氏の先祖は近江であり、田沼意次の市政を頼ったとのこと。親近感を持った。
・東近江農村基本計画、５の基本方針をもとに指標、目標を設定、理想の将来像を目指して令和７年計画終了予定。
・あぐりステーションの取り組みには参考になる事例が多くあり牧之原茶農家の実態に合わせたシステムが可能か検討に値すると思われる。
・流通システムの構築、特に中規模流通システムの構築に向け（ほうせんかん、寄ってけ市）などに牧之原市に適用か検討。
・小規模流通システムは商品管理を生産者が行う、売値が決めることが出来る。

甲賀市

・土山茶（かぶせ茶）、朝宮茶（煎茶）
朝宮茶は１２００年の歴史。天皇が茶の育て方を教えたのが起源。標高３００ｍから４５０ｍの山で栽培する、

・牧之原市との比較
作付面積１６０２ｈａに対し、土山は１６１ｈa、朝宮は８５ｈa

・土山一晩ほうじ（茶業会議所、茶農家、ＪＡ、茶匠、委託業者）とブランでイングを行う。

・JA ハイナンの、のぞみはどうなったのか、

京都府和束町

・宇治茶の里、茶源郷。

・人口 3474 人・バスもすれ違いに苦労する細い山道を走ること１時間余、和束町役場へ。馬場町長自ら職員の先頭に立ち、熱心な説明をされた。

・800 年の歴史の茶農家との技術、匠比べの苦労話と、また観光に力を入れており英語の学習や観光ルート、カートなど本格的である。さすがブランドメーカーとしてプライドを感じた。

全体的に

視察ルートとしてはよく選んであり、若狭、彦根、大津、甲賀、和束（京都）とお茶について文化、匠、今でいうＳＤＧｓ（持続性）について集中的に学んだ。

以上

# 視 察 研 修 報 告 書

牧之原市議会議長　様

氏名　　中 野 康 子

| | |
|---|---|
| 研　修　名 | 令和６年度　牧之原市議会総務建設委員会視察研修 |
| 研修の期間 | 令和６年７月１日(月)～７月３日(水) |
| 研　修　先 | （１）　福井県若狭町<br>（２）　滋賀県東近江市<br>（３）　滋賀県甲賀市<br>（４）　京都府和束町 |
| 研修の目的 | （１）　福井県若狭町：就農支援について<br>（２）　滋賀県東近江市：高収益農業を実現するための施策について<br>（３）　滋賀県甲賀市：市の特産品であるお茶に関する取組について<br>（４）　京都府和束町：宇治茶の郷づくりについて |

（１）福井県若狭町

農業者が減少する状況を危機と捉えた町長の思いが、町議会に於いても同じ思いだったとの事。

アンケートを実施したところ、５割の人が 10 年以内に農業をやめるという結果となり、農業総合応援計画が策定された。

当時の町長の発案で、民間の知恵を借りてやる方向で、民間企業（ヤベキン）の協力のもと企業から職員が派遣され、農業の課題を社会的課題として捉え、平成 12 年～13 年にかけて、都会に住む若者が農業に興味を持っていることが示され、農学舎の設立となった。

農学舎に於いては、担い手の育成として、地域に溶け込み、地域と人との距離感を縮めていくことなど、農業はもとより社会的な学びを体験することなどを研修目的とした。

町から研修費用が 500 万円出ているが、余り多くの人を集めず、年間３名～４人の範囲のなか、農業者の育成に真摯に取り組んでいる姿勢が強く感じられ、農業後継者の育成に民間の知恵を取り入れていく必要性を感じた。

（２）滋賀県東近江市

近畿地方最大の耕作面積（約 8,300ha）の 96％を水田が占めている。

米の生産調整の終了した後の、水田農業で食べていける所得を得るために、「農村振興計画」において「もうかる農業経営」をテーマとして、集落営農の強化策として、集落を法人化したとのこと。

４つの JA が資本金 2,000 万円を出資し、東近江あぐりステーションを設立した。

収入の安定化をめざし、農作物の安定供給に尽力し、管理・運営がしっかりと行われ、過剰にならず、すべて安心して作物を作ることができ、非常にうまくいっていることを実感した。

（３）滋賀県甲賀市

令和５年４月に「オーガニックビレッジ」を宣言した市である。

土山と朝宮の２つの茶産地があるが、さらに知名度が高まることを期待して「甲賀市有機農業実施計画」を策定した。

そのなかで「土山一晩ほうじ」にクラウドファンディングを活用し、わずか１か月で 40 万円の計画だったことが理解できなかったが、「土山一晩ほうじ」の名を知ってもらう手段であったとのこと。ブランド化に向けた努力を理解できた。

（４）京都府和東町

町長自らお出迎えをいただき、私達の質問にもすべて町長が答えるという形式での研修であった。今回の視察先で、初めてお茶碗でお茶を入れてくださったのはこの町だけであった。

ペットボトルが主流ではあるが、お茶を基幹産業と位置付けている我が市でも、リーフでお茶を出している。このことは続けてほしいと改めて思った。

茶価が低迷しているが、和東町は、てん茶が主流で、近年、キロ単価で 4,000 円～5,500 円と年々上がっているとのこと。

高齢化でやめていく茶農家もあるが、補助事業を活用して他県からの援農支援者を年間雇用しているとのことだが、茶価が高いことで年間雇用することはできるものと思う。

静岡県では、窒素肥料を減らしているが、お茶の味が落ちるのに、なぜ減らしたのか理解できないとの質問があった。

静岡県は、環境に厳しく、窒素を多量に使うことにより、川、池等が汚染されることから、減らすことを県、JA が主導で行ってきた。

静岡県は、いっさいの添加物を入れることを認めないという厳しさで行っている。

しかし、宇治茶等は、茶葉に添加物を入れている。

和東町でいただいたお茶に甘味が口の中に残ったのを感じたのは私だけだろうか？

健康によい、おいしいお茶を市民に提供できることがお茶を作る者のつとめだと、改めて考えさせられた。

# 視 察 研 修 報 告 書

牧之原市議会議長　様

氏名　　加 藤　彰

| | |
|---|---|
| 研　修　名 | 令和６年度　牧之原市議会総務建設委員会視察研修 |
| 研修の期間 | 令和６年７月１日(月)～７月３日(水) |
| 研　修　先 | （１）　福井県若狭町<br>（２）　滋賀県東近江市<br>（３）　滋賀県甲賀市<br>（４）　京都府和束町 |
| 研修の目的 | （１）　福井県若狭町：就農支援について<br>（２）　滋賀県東近江市：高収益農業を実現するための施策について<br>（３）　滋賀県甲賀市：市の特産品であるお茶に関する取組について<br>（４）　京都府和束町：宇治茶の郷づくりについて |

【はじめに】

この度の委員会視察における基本的な課題と捉えている「お茶を中心とした複合経営の支援について」に込めた思いとして、本市の特色であるお茶の現状をなんとかしたい、その点を押さえたうえで、まず、１つ目の課題は、「お茶以外の作物の複合経営」、２点目は、「担い手不足への対応」、３つ目が、「海外への販路拡大・情報発信」、そして、担い手不足に対応して「農業移住施策」を検討する。こういった基本的な課題を踏まえた中で視察研修を実施しました。

【視察研修全体を通しての所感】

まず１つは、農業移住施策については、「福井県若狭町」における「㈲かみなか農楽舎」での農業技術・農村生活研修等の実施により、農業を志す若い世代が増えている。その理由には、新しく農業を始めようとする人を支援するシステムが整っていることが挙げられる。

具体的には作物の栽培方法や経営を支援するなどであるが、個人で農業を始めるという形だけではなく、農業法人への就職という形で農業に従事する機会が確保されていることが大きいのではないか。つまり、農業が持続的に発展していくためには、「人」の確保が不可欠であり、次世代を担う若者が農業に継続的に入ってこなければならない。そのための要素としては、「ある程度の所得」「適正な労働」「成長の実感」などが必要であることを学ぶことができた。

次に、複合経営の面については、「滋賀県東近江市」における「㈱東近江あぐりステーション」の取組では、「国営大規模ほ場整備事業」で約 680ha を次世代農地へと数値目標を設定し、高収益農業を２割以上増やしていくことをミッションとし

ている。また、地域商社による中規模流通システム構築を進め、米をベースにしながらも儲かる農業への転換を進めている。さらには、「東近江市高収益作物生産振興事業」により生産出荷に必要な機械・施設の整備等にかかる費用の一部を補助する事業が行われている。これは、水田等を高度に利用し、野菜等を周年栽培できる輪作体系の確立及び収益性の高い野菜、果樹、花き・花木などの高収益作物の生産振興に資するためとしている。

こういったことからは、大規模に営農しようとする農業者に農地を集約していくこと、地域ごとに合った農業の形を計画し、その実現に向けて地域全体で努力できるような仕組みの構築が挙げられる。本市としては、生産性の高い畑地への転換は進めつつ、ブランド米として「高価でも食べたい」とされるものを応援する施策の必要性を感じた。一方、水田は、洪水防止機能をはじめとするさまざまな機能を有している。また、観光資源としても有用である。これらの水田の特質を守っていくことも本市において今後ますます大切になってくると思う。

３つ目に、「京都府和束町」では、町全体に茶畑が点在しており、この茶畑の眺望は生業の景観として京都府景観資産登録第 1 号となり、平成 27（2015）年には「日本遺産」に認定されている。観光資源としての価値を発揮している。農地で耕作したものを売るという発想だけでなく、茶畑を見るという体験自体の価値を提供するという発想からは、新しい農業の魅力となって就業者を増やすことや耕作放棄地を減らすことにつながっているということを学ぶことができた。

最後に、「滋賀県甲賀市」の取組については、みどりの食料システム戦略に関し、茶に特化した形ではあるが、オーガニックビレッジ宣言をしている。現代は食料の安定供給・農林水産業の持続的発展と地球環境の両立が必要な時代である。その面から捉えたとき、本市においても化学農薬のみに依存しないことや化学肥料使用料の低減など、有機農業に関しての取組を本市らしく進めていくことは、重要な課題であると改めて認識した。

【視察先概要について】

福井県若狭町

・説明員、産業振興課長中村様：㈲かみなか農楽舎の設立経緯について

H11～12 年にかけて議会から将来の農業をどう考えているかの質問があった。それを受けて全農家のアンケートを実施。10 年以内にやめるとの結果であった。認定農家５ha、40～50 代多かったが後継者不在。橋本佐太郎さんという方が町長のところへ農村総合公園構想について、観光だけではだめで、民間の知恵をもらうことの必要性を訴える。その声を踏まえ、大阪の「類設計室」を訪ねる。そこは、三重、奈良の方で農園をやっていた。アドバイスとしては、都市部から若者を招いて定住をしてもらったらということであった。就農定住事業のための研修事業をメインに据え、その他にインターンシップ事業・体験事業・農業生産事業・直販事業の５つの事業を行う法人として、平成 13 年 11 月に設立。

・説明員、㈲かみなか農楽舎取締役八代恵里様：かみなか農楽舎が目指すもの等について

八代氏は大阪出身、H16 年～研修生、その後社員へ。「かみなか農楽舎が目指すものは、都市からの若者の就農・定住を促進し集落を活性化することを大きな目標としている。」と。集落に溶け込みながら協働生活を行う、地域の一員になることを重視しているとの説明を受けた。

その後、農村総合公園研修等を見学。

かみなか農楽舎→社員４名、研修生１名、卒業生（定住者）24 名。農業総合公園内に、体験田、畑、ハウス３棟。水稲栽培用の田 約 27ha、転作（飼料用米・大麦）約 16ha、野菜（ジャガイモ、ソラマメ等）約２ha。

滋賀県東近江市

・説明員、農林水産課長ほか：高収益農業を実現するための施策について

背景は、担い手不足、高齢化、販売価格への転嫁困難。集落営農組織の弱体化等。収入面で業として食べていけること。近江牛は高い所得で後継者いる。個々の農家だけでは収入面低い。集落単位で農業を営む（集落営農法人 117 法人（R5）。

□もうかる農業への取組

国営大規模ほ場整備事業、高収益作物の生産拡大支援、地域商社の設立（H29）アグリプラン改訂版を見ると、５つの基本方針の中で、地域商社（㈱東近江あぐりステーション）を中核とすること。高収益作物の生産拡大、農地中間管理事業の積極的な活用、集落営農の強化と集落を越えた連携の促進、スマート農業の推進、中小及び家族経営などの生産基盤の強化・・など。生産者がいいと思うものを生産し提供することから消費者が必要としているものを生産し提供することの視点を取り入れるなどその仕組みを構築することを目指している。

□水田野菜生産拡大推進事業について

▽水稲・麦・大豆の農業から水田を活用した野菜の生産への転換を支援。

「㈱東近江あぐりステーションの取組」〈資料Ｐ３〉米・麦・大豆と野菜の収支比較 10a あたり単位：千円［収支］⇒ 麦 42、米 80、大豆 84、麦＋大豆 106、玉ねぎ 228、キャベツ 243、きゅうり（施設）893 ［滋賀県農業経営ハンドブックより］〈同資料Ｐ５〉地域商社が担う中規模流通　そのメリットは、出荷された野菜等は安定価格で買い取るため安定的な収入が見込める。商品化作業は地域商社が行うことから生産に集中できる。デメリットは、大量出荷が見込めない。〈同資料 P17〉国営農地再編整備事業（約 680 ㌶を次世代農地へ）－東近江地区－高収益農業 2 割以上増やしていくミッション。

滋賀県甲賀市

・説明員、産業経済部長近藤様、農業振興課長久保様：「近江の茶」甲賀市内の産地、現状（生産量・農家戸数）甲賀氏の取組みについて

□甲賀市内の産地

産地は、土山町の土山茶（かぶせ茶）と信楽町の朝宮茶（煎茶）。栽培面積は、土山町→作付面積 161ha 荒茶生産 411t。信楽町→作付面積 85ha 荒茶生産 130t。

販売農家戸数Ｒ１(177 戸)→Ｒ５(164 戸)、栽培面積Ｒ１ (281ha) →Ｒ５ (252ha) 。
□令和６年度当初予算額（市合計 334,333 千円）【内訳】一般：98,045 千円、県費：236,288 千円
▽甲賀の茶ブランド化研究調査業務委託 4,000 千円（土山一晩ほうじ）▽リーフ茶消費拡大推進業務委託 2,500 千円（小学校及び保育園へのリーフ茶の提供・急須でのお茶の淹れ方教室を開催）▽甲賀の茶 PR 業務委託 5,500 千円（委託先：一般社団法人東京滋賀県人会首都圏での「甲賀の茶」PR）▽このほか茶生産者への助成として、産地パワーアップ整備事業費 283,545 千円など７事業で、32,690 千円。
□オーガニックビレッジ宣言（令和５年４月 28 日）について
「みどりの食料システム戦略」を踏まえた取り組みを進める。▽甲賀市有機農業実施計画で５年後に目指す目標は、▽オーガニック茶生産面積：令和３年度 9.6ha→令和９年度 11.6ha▽オーガニック茶生産者：令和３年度 14 人→令和９年度 18 人以上（令和３年度茶販売農家 170 戸中）
▽甲賀市には「甲賀の茶及び甲賀の地酒を信楽焼の器でもてなす条例」が議員提案で条例化されている。地域の方々が地場産品を使用し、その良さを市外に発信し、甲賀のお酒・甲賀のお茶を信楽焼の器でつなぐことを目指している。
この度の我々の視察にも信楽焼の湯飲みで甲賀産のお茶でのおもてなしをいただいた。

<u>京都府和束町</u>
・村山副議長挨拶　人口減、1 年で 100 人ほど。木津川市へ転出。日本遺産の維持。後継者不足は喫緊の課題。
・馬場町長挨拶　茶畑と家がくっついている（この風景は次世代に残したい生業の姿として京都府景観資産登録第 1 号。その後「日本で最も美しい村」連合に加盟。2015（H27）年には「日本遺産」に認定）。600ha 1 番多いとき 450 軒、今 200 軒。今年の状況はてん茶が高騰。煎茶 4,000 千円前後。肥料代 3 倍。和束町の特徴として、茶農家は探求心旺盛。
・説明員、農村振興課長松井様、同課環境係長北澤様：宇治茶の郷づくりについて
▽茶価の低迷の状況は、茶農家数は 5 年で２割減となるが、担い手不足は高齢のため。▽茶を軸とした雇用関係は、和束茶カフェや天空カフェなど。海外輸出の取組はセミナー実施など。▽企業の設立支援の状況は、経営相談など。▽お茶と観光を融合したまちづくり施策は、景観資産として茶畑を見て楽しむ。▽「茶源郷和束ブランド協議会」設立経緯と同協議会の役割は、2022 年 10 月発足。構成団体：商工会・町・一般財団法人和束町活性化センター・町雇用促進協議会。ロゴマーク作成。▽「宇治茶生産の景観」に関しては、和束町の茶畑風景が、宇治茶の郷として後世に伝えていく価値あるもの。山城地域を代表する生業景観として登録・選定されているが、その価値（800 年の歴史があるが）を地元の人は分かっていないことが課題であるとのこと。

# 視 察 研 修 報 告 書

牧之原市議会議長　様

氏名　　石 山 和 生

| | |
|---|---|
| 研修名 | 令和６年度　牧之原市議会総務建設委員会視察研修 |
| 研修の期間 | 令和６年７月１日(月)～７月３日(水) |
| 研修先 | （１）　福井県若狭町<br>（２）　滋賀県東近江市<br>（３）　滋賀県甲賀市<br>（４）　京都府和束町 |
| 研修の目的 | （１）　福井県若狭町：就農支援について<br>（２）　滋賀県東近江市：高収益農業を実現するための施策について<br>（３）　滋賀県甲賀市：市の特産品であるお茶に関する取組について<br>（４）　京都府和束町：宇治茶の郷づくりについて |

福井県若狭町の特徴的な取り組みは、有限会社かみなか農楽社であった。
この取り組みは若狭町で農業研修者を募集し育成するというもので、農業に携わりたい方々を県外から呼び込むことに成功している。農業をしながら、共同生活を行い、研修後には独立を目指して活動していく。
非常に意義がある取り組みであった。かつ、予算が数百万円規模ということで、事業規模の割には安いなと感じた。
しかし、これを真似するには相当情熱を持った教育者が必要であることと、茶を中心の牧之原でできるか？という点は、難しい面があると感じた。

滋賀県東近江市に関しては、株式会社東近江あぐりステーションを実施していることが特徴的だった。これらの概要は市内農家の農作物の販路となるための事業である。
この事業も、農家にとっては安定した販路が確保できて嬉しいものである反面、赤字事業だということを聞き、なかなか実施に踏み込みづらいものであるなと感じた。

滋賀県甲賀市については、自治体の茶ブランドの土山一晩ほうじ茶が特徴的であった。これは、マーケティングの観点から緑茶ではなく、あえてほうじ茶を選んでいることであったり、きれいな動画を作ったりしていることが学びであった。

最後に、京都府和束町では、単価の高い宇治茶を生産していることが特徴である。お茶が中心の街で、規模をデカくやるのではなく、伝統的な技術を大切にしている農業だと感じた。
茶を観光に使うという観点が、非常に面白く、県外からきた私にとっては牧之原市もぜひやれたらいいなと感じた。